

幼児の教育 第99巻 第2号 平成12年2月1日（毎月1回1日発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可 ISSN0289-0836

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

2000 / 2



第99巻 第2号 日本幼稚園協会



保育実技シリーズ

最新刊!



① 30分でできる壁面アイデア

浅野ななみ 監修

制作者/石川元子・千金美穂・渡守武裕子

基本パターンを使って、効率よく時間をかけずに見栄えのいい素敵な壁面を作ることができるアイデアが満載。基本的な製作上のポイントを教える「30分で作るためのテクニック講座」付き。12か月の季節感あふれる壁面と誕生表を紹介。作り方、型紙も付いています。

AB判・96頁・定価：本体2,200円＋税



② 30分でできるプレゼントづくり

阿部直美 監修

制作者/木曾健司・小沼かおる・門井幸子・宮崎由美子

誕生会をはじめ、各種園行事に必要なプレゼントや誕生カードのアイデアと作品の数々を月別に紹介。身近な素材を活用して、簡単にでき、記念としても残る作品を満載した本書は、忙しい保育者の強い味方になります。作り方と型紙をつけたので、誰でも容易に作れます。

AB判・96頁・定価：本体2,200円＋税



③ 30分でできる小物づくり

鈴木みゆき 監修

制作者/あかまあきこ・佐々木伸・高野まどか・立花愛子

保育の中で使える小物のアイデアを月ごとに紹介しています。季節や行事などを考慮し、現場で使いやすいように配慮しました。各月の保育のポイントがわかる「保育一口メモ」付き。作り方や型紙も付け、バリエーションも豊富に掲載しています。

AB判・96頁・定価：本体2,200円＋税



④ 30分でできるおたよりづくり

小山孝子 編著

イラストレーター/岸本真弓・ヤスダイクコ・あかまあきこ

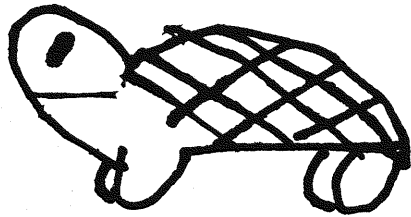
おたよりを素早く作るパーツ集。まず、Q & A形式でそのコツをやさしく解説。そして、園だより、クラスだより、行事だよりの各書き出し文例を紹介し、その後に、見出し例、囲みケイ・飾りケイ、イラストを配しました。本書があれば、あなたのおたよりづくりは万全です。

AB判・96頁・定価：本体2,200円＋税

キンダーブックの
フレール館

幼児の教育

第99巻 第2号



幼児の教育 目次
——第九十九卷 第二号——

© 2000
日本幼稚園協会

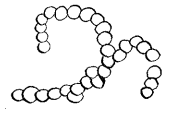
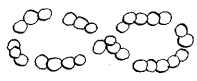
巻頭言 人間関係…………… 繁多 進…………… (4)

子育ての探究 その六 中世末期における母親の苦悩…………… 柴崎 正行…………… (7)

保育現場からの現代幼児論(6) 個人を見つめる…………… 友定 啓子…………… (14)

幼児のコミュニケーション——保育の現場から考える(1)…………… 田中三保子…………… (22)

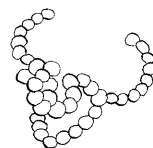
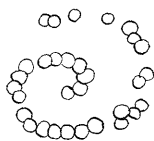
私が幼児教育を志した頃(4)…………… 津守 真…………… (31)



特集へつくる

楽しく作る 汗して作る	古谷 久美	(38)
小児病棟と中学校での『空間』づくりから	倉田 知子	(42)
豊かな自然が私の原点	金井久美子	(46)
Kチエアー	北村 俊道	(50)
児童館の露天風呂作り	宮里 和則	(54)
日常の遊びの中で突然気づいた体験	清原 規子	(59)
―U夫がつくったテントから―		

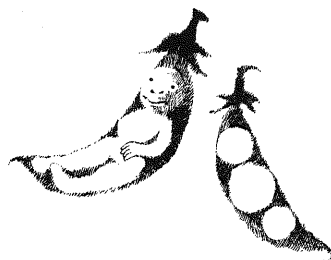
表紙絵／田中 千尋
 扉題字／津守 真
 扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園児
 カット／彌永たたえ「豆まき」
 編集委員／田代 和美・吉岡 晶子・田中三保子
 編集部／仲 明子



巻頭言

人間関係

繁多 進



最近の子どもは人間関係の持ち方が下手になっているとよく言われる。たしかにその通りだと思う。問題は どうしてそのようなことになってきたのかということである。人間の赤ちゃんは誰もが他者との関わりを持つとうとする本能をもって誕生すると考えられている。自分自身の力で自分の生命を維持できない赤ちゃんは周りの人々との関わりを通して自らの生命の安全を維持していく。

もちろん、主として関わるのは母親であり、父親である。生後六ヶ月か七ヶ月にもなれ

ば、それまでの相互作用の経験を通して、まず、それまでに最も関わってきた人に対して、「この人が自分の保護に一番責任をもっている人だ」「この人といれば自分の生命は大丈夫だ」「この人といつも一緒にいたいな」「この人大好きだな」という特別の感情をいだくようになる。赤ちゃんが初めて愛情と信頼という感情を具体的な対象に向けたというこゝとであり、愛着と呼ばれる心の絆の形成である。最初の愛着の対象が多くの場合母親になるのは、それだけ母親が関わってきたからにはかならない。

母親を愛着の対象にした赤ちゃんは、やがて父親に対しても「この人も母親と同じように自分を守ってくれる人だ」と思うようになり、このようにして祖父母も、きょうだいも、仲間も、近隣の人々や親戚の人々も愛着の対象としていくというのが普通の発達である。

このようにして順調に人間関係を深め、広げてきた子どもたちが、将来、円滑な人間関係を営めないために人間社会に適応できなくなるというようなことは考えにくい。人間関係能力とは「人を愛する能力」であり、「人を信頼する能力」と言い換えてもよいものであろう。両親をはじめとして、多くの人々を愛と信頼の対象にしている子どもたちは、人間関係能力を十分に備えた子どもたちにはちがいないからである。

そうであるとするならば、円滑な人間関係を営めず、人間関係でつまづく子どもたちは、両親への愛着を形成する過程か、あるいは、愛着の対象の輪を多くの人々に広げてい

く過程のどちらかで問題があった子どもたちということになる。

育児情報が氾濫し、「早期教育だ」「右脳だ左脳だ」「赤ちゃんのときから外国語を」と叫ばれ、「離乳食はこのように」とこと細かなマニュアルを示されると、そっちの方に頭が向いてしまって、赤ちゃんにとって最も重要な課題は「両親を大好きになること」ということを忘れてしまい、両親への愛着を形成する過程に問題をもたらすということがあるのかもしれない。

両親への愛着を土台にして、愛着の対象を広げていくときにも、今日の社会は大きな問題を抱えている。核家族が孤立化していて、子どもたちは他の人々と関わる機会を極端に制限されている。少子化は家族内の人間関係や親族関係を縮小化し、地域社会の崩壊は近隣関係を浅薄化している。昔の子どもたちと違って、今日の子どもたちはごく自然のうち

に多様な人間関係を経験するというような状況にはおかれていないのである。

すべての親が、まずは子どもから好かれ、信頼されることに専念し、そして多くの大人が、自分の子ども以外にも、周りの子どもたちのせめて一人からでも「大好きなおばちゃん」「大好きなおじちゃん」と思われたいと願うならば、人間関係が苦手な子どもなどいなくなるのではないかと思うのだが……。これは夢物語であろうか。

(白百合女子大学)

子育ての探究　その六

中世末期における母親の苦悩

柴崎　正行

中世も末期となる室町時代後半にかけては、各地に戦国大名が割拠し、戦いと飢饉によって都やその近郊の農村部は大変に荒れていた時期でもある。こうした社会的荒廃から救いを求める人々が多かったこともあって、鎌倉時代に庶民のために成立した仏教諸派の思想が広く一般の人々にも行き渡り、全国の村々にも各宗派の寺社が建立されていった。

こうした不安定な時代において、子育てはどのような行われていたのであるうか。またこうした仏教思想の一般の人々への普及は、子育てにどのような変化をもたらしたのであるうか。今回はこうした観点から、中世末期の戦国時代における子育てについて探究してみる。

フロイスの見た日本の子育て

ここに一冊の文庫本がある。書名を『フロイスの日本覚書』という（注1）。この本の存在に関心を抱いたのは井上清著『日本女性史』三一書房（一九五五年）を読んでいたときに、室町末期から江戸時代初期にかけてキリスト教信仰が普及した背景についての記述にふれたことで、当時のキリスト教宣教師たちの書き記した書物が出版されていることを知ったことがきっかけである。

キリスト教はその後もなく布教が禁止され排除されたために、当時の宣教師が書いた記録はわが国の資料からは失われたが、宣教師たちがスペインやポルトガルなど母国に送った手紙が残っており、それらが出版されているのである。この『フロイスの日本覚書』もそうした書物のひとつである。

この書物の著者はポルトガル人のルイス・フロイスであり、彼は十六世紀の後半にイエズス会司祭として

日本に三十数年間滞在したが、その間に見聞きしたことを書簡としてイエズス会に記録報告し、最後は六十五歳で長崎のイエズス会修道院で息をひきとつたという。この書にはわが国の中世末期である十六世紀末の子育ての姿が、ヨーロッパの子育てと比較する形で書かれており、読んでいて大変面白かった。覚書の内容には、日本ではいとも簡単に堕胎をし中には二十回も墮ろした女性がいるとか、日本の女性たちは育てることができないと思うと嬰兒の首筋に足をのせてすべて殺してしまうというような記述もみえる。また日本の子どもたちは生まれるとすぐに手が自由になる着物を着せられていることや、揺籠や歩行器を使っていないで自然のままであること、ごく幼い少女が嬰兒を負ぶっていること、三歳になる頃にはひとりで箸を使って食べること、親はめつたに子どもを叩いたりしないこと、すべての子が仏僧の寺で読み書きをまなぶことなど、子どもの姿も様々な角度から具体的に記述されている。

ルイス・フロイスは生涯に『日本史』『日本覚書』『日本総論』という三冊の書物を残しているが、こうしたフロイスの記録を分析して、十六世紀後半の日本における子育ての実情を分析した研究も、最近出版された。その著者の峰岸はルイス・フロイスの記録を分析して、当時の村の女性の苦しみを、①病気、②出産と育児、③貧困という三つに区分している(注2)。

出産の悩みとしては、男児の出産が期待されていたことや、産まれた子が健康児でない場合もあったことなどが示されているという。

こうした当時の女性(母親)の苦しみの内容を見ると、いつの時代も親はわが子の健康を願っていたし、一方で貧困による子育ての苦しみにたえず直面していたことがわかる。また周囲の期待に応えようとすると、持ちや、障害児が生まれた場合の苦悩も、時代を越えて存在していることがわかる。こうした苦悩の中で、現在とその内容が大きく異なるのは、当時の母親がいつも簡単に産まれたばかりのわが子を「間引きして殺

した」という行為であろう。そこで次にこの間引きについて考えてみたい。

中世における間引きの実態は？

私はこれまで間引きは、飢饉が度重なった江戸時代に主に見られた行為であるように思っていたが、このフロイスの記録からするとこの行為は中世からすでに行われていたことがわかる。

フロイスのこうした記述について詳細に検討している網野は、なぜ中世から間引きを行っていたかという点について、従来は単純に貧困と生活苦によるとされてきたが、それだけではとらえきれないとし、未婚の母が多かったことと、宗教的な問題を指摘している(注3)。

もし飢饉の時に間引きが多くなされ



たのであれば、戦国時代であっても領主は禁止のご法度を出したと思われる。そこで大名が領内に公布した法度で間引きが禁止されていないかを中世に關して読んでみた。中世の大名領国規範と村落の女性との關連性について調べた田端によれば、逃亡や人身売買の禁止およびその処置の仕方については多くの家法に書かれているようである。しかし墮胎や間引きについてはほとんどふれていないようである(注4)。これは何を意味するのであろうか。

子どもを守ろうとした母親

十六世紀初頭に、和泉国(大阪府)が不作になり多くの農民が餓死しつつあったという。日根莊の莊民たちは蕨を採取して何とか飢えをしのいでいたが、ある晩にその大切な蕨が盗まれた。その犯人を発見したところ母子三人で暮らしている母子家族であつたが、莊民たちはこれを殺害してしまつたという。その莊では翌月にも、蕨を盗んだ家族が発見され莊民によつて殺

害されたが、その家族も伴侶なき女二人と十七、八歳の男子そして年少の子らの母子家族であつたという(注5)。また女子どもを安価で片つ端から売り飛ばしてしまふ「人商人」も横行していたやうで、売られた子女が都市だけでなく東南アジアなどの外国で賤役として使われていた(注5)。

悲惨な話であるが、ここに当時の飢饉に対する農民の姿勢が描かれているように思う。飢饉といつても、中世においてはすぐに子どもを間引いたわけではないやうである。食いぶちを減らすために、まずは人買いに売つたのであろう。これならば親子で別れることはなつても、死ぬことはない。次の手段としては、親子で何とか生き延びる方法を考えたのであろう。その結果がこの話のやうに一家で殺されることにもなつた。しかしここにはわが子を死なせたくないという母親の強い意志が感じられる。

たしかに中世にはフロイスが見たやうに日本では間引きが行われていたかも知れないが、そのことは当時

の母親が安易に間引きをしていたということにはつながらないだろう。当時の母親も何とか子が生き延びさせたいと願っていたことは、これらの話が示しているといえる。

だがこの話を読むと、中世末期において女性や子どもの地位や子育てについて大きな変化が生じていることがわかる。そこで次にその変化について検討してみたい。

疎外されるようになった母親

飢饉のときに日根荘の荘民が一九となって蕨によって生き延びようとしていたことは、当時の農民が村落共同体として荘を運営していたことを意味している。しかも、蕨を盗みに入って殺害されたのはいずれも母子家庭であった。これが単に日根荘だけの問題なのかどうかはまだわからないが、荘の中で母子家庭は父親のいる家庭とは異なる位置づけになったのではないだろうか。前回にもふれたように中世を通して家族内の

権限が父親に集中していったので、父親がいない母子だけの家族はその権限が荘の中で弱まったり無視されるようになったことは十分に考えられる。

こうした背景には、女性を卑しいとみなす仏教的な女性観が普及したことも無関係ではないだろう。仏教は七世紀に日本に伝えられたが、平安時代までは貴族階層のためのものであった。しかし鎌倉時代からは庶民にも広がっていき、中世の人々の人間観の形成に大きな影響を及ぼした。この仏教の教えでは、死後に地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天の六道に生まれ変わって転生する六道輪廻の輪を解脱することが、往生し成仏できることであると考えられている。女性は五障があるために成仏できないとされていたが、鎌倉時代以降は女性も三従（子として親に従い、妻として夫に従い、夫なきのちは嫡子に従う）の徳を守れば成仏できるとされるようになったという（注6）。

しかしこうした三従思想は女性に対して一方的に従を強いるものであり、また子の無い女性は成仏でき

ないとする思想にもつながったのではないだろうか。またこのような中世における仏教的な女性軽視の思想が、この日根荘のように母子家庭や子どものない女性を蔑視する思想へとつながっていったものと考えられる。

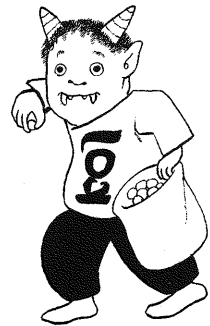
このことを裏付けるように、領主の館には多くの下女(女性の使用人)が住んでいたが、彼女らは独身で過ごしたわけではなく同じ下人身分の男と結婚することがあったという。しかし自らの家をもてないために、下人の男が下女のもとに通うという妻問い婚の形態をとっていたという。こうした下女は死んでも供養してもらえず、多くの場合に遺骸は河原に棄てられたという(注7)。これは家族も子どももない女性はどうせ成仏できないのだから、お葬式や供養の必要がないと考えられていた証拠ともいえよう。

ではこうした下女が男と結婚して子どもを持てたかという点、それも不可能であった。子どもが生まれても実際には子育ての時間が保障されることはなかった

ので奉公が続けられなくなってしまうために、多くの場合に墮胎するか産んでも殺さざるを得なかったとい

う(注7)。下女にとって成仏するために残された道は、男と逃亡して地方に下向してそこで世帯を持つことしかなかった。そのために領主は逃亡を禁止したのである。

こうして資料を検討すると、中世においては領主や主人に仕える下女や女中は結婚しても単身でいざるを得ず、仕事を続けるために泣く泣くわが子を殺していたというのが実情ではないだろうか。フロイスが子殺しとして記録し、網野が未婚の母が多かったと指摘している背景には、こうした実情が存在したのではないだろうか。



親を苦悩から救うために

だが当時の出産は現在と比べると危険も大きかったし、無事に生まれても病死することも多く、養育には大きな困難が伴った。そのために当時の親にとつてはわが子が死ぬことはよくある出来事になっていたにちがいない。それをいちいち嘆き苦しんでいたのでは、身が持たないこともまた事実であったのだろう。そのためにも仏教思想ではこうした親の苦悩を解放するために、七歳までに死んだ子は神の世界に戻れるという「無縁思想」によってわが子の死をとらえていた。

この思想によって墮胎や産まれたばかりのわが子を殺すという行為は、この世とあの世を往来する不安定な状態にある胎児や新生児を、あの世に戻すものであって決して殺しているわけではないという肯定的な論理が親の中に普及していったのである。この思想によって実際には精神的に救われたという母親も多かったことであろう。

いずれにしても、中世末期の子育ては母親にとつてもそして子どもたちにとつても、苦悩が多くなつた時代であるといえる。

(東京家政大学)

注

- 1 E・ヨリッセン著 松田毅一訳『フロイスの日本覚書』中公新書 一九八三年
- 2 峰岸純夫『中世を考える 家族と女性』吉川弘文館 一九九二年
- 3 網野善彦『日本の歴史をよみなおす』筑摩書房 一九九一年
- 4 女性史総合研究会編『日本女性史 第二卷中世』東京大学出版会 一九八二年
- 5 横井 清『中世民衆の生活文化』東京大学出版会 一九七五年
- 6 井上 清『日本女性史』三一書房 一九五五年
- 7 峰岸純夫 前掲書

ところが、何もしない学生達に遠慮なく攻撃する、あるいは反撃されないと見ると、見知らぬ人にも突然攻撃をするというわけのわからない行動が目につくようになってきた。今回取りあげることはしなかったが、これとよく似たもので、攻撃はしないけれど、自分が不機嫌になってしまうという子どもがいる。相手に対して一方的に怒りを感じているというのが共通する点だ。たまたまその対象になった人は理不尽であるし、解決のしようがない。その怒りを本来向けるべき相手ではなく、別の者に向けられるという対象の転化が行われているのである。本人もどうしてそうなるのかわからないでいて、問題は解決しないままに、否定的な行動だけが残る。それが尾を引いて、結果的に他者との関係まで壊してしまう。幼児の段階でこれを自覚することは困難である。

これで一番問題なのは、大人あるいは他者一般に対する信頼感を作り出せないということだ。同時にそれは自分に対する信頼も持てないということにつながる。

る。自己および他者への不信感・被害感・防衛感を絶えず引きずっている。そのことが現実の人間関係に悪循環となつてふくらんでいく。この状態から抜け出すには、その子が心から信頼できる大人と長い時間が必要である。

子どもの特権としての暴力

基本は同じだと思うのだが、そこから発生したもう一つの攻撃行動がある。それは、子どもだから大人には何をやっても許されるという、子どもの側の特権感情である。笑つて攻撃をしかけてくるというのがそれである。どこかで大人を試しているのだとは思ふ。これはまっとうに対決するしかない。

生徒が教師に殴りかかっておいて、「できるものなら反撃して見る。体罰教師で訴えてやる」と居直るのと同じ発想である。人として許されないこと、他者を傷つけることでも、子どもだからと大人が見逃し、許し、認めているとそうなる。痛いときには痛いとい

い、嫌なことは嫌だ、応えられないと、人として率直に子どもに対応する必要がある。自分は大人だからと譲ってばかりいると、子どもは大人の気持ちに不感症になってしまう。大人にも気持ちがあるということすら気付かない。

そういえば、神戸のあの少年は、愛されない子どもでもあつたけれど、十四歳までは人を殺しても死刑にならないと言っていた。

大人不信からの攻撃行動と、子ども特権としての攻撃行動には、共通点がある。それは大人と子どもの関係が力関係あるいは取り引き関係のところに出現するということである。大人が強ければ大人不信、子どもが強ければ子ども特権というわけだ。そこにはお互いに相手を理解するということがない。幼児期からそういう親子関係しか体験していないのは不幸だ。

教育の鬼門

この連載は「学級崩壊」言説に対する危機感から始

まった。最後にその問題に戻らなくてはならないと思う。私の危機感は、小学校での子どもの荒れた姿が公開されるやいなや、その矛先が幼児教育界における「自由保育」に向けられたことであつた。これはマスコミでも、小学校現場でも、大学人にもあるいは教育評論家あるいは実践家からも期せずして巻き起こってきた。

幼稚園や保育園で自由に遊ばせておくからこうなるのだ、もつとちゃんとしつけをしろという大合唱だ。「自由に遊ばせておく」ことに対する誤解が入っているので、反論はまことにやっかいである。

私だってそう言われれば、幼児教育の場において、「自由保育」を支持する人間として、小学校の硬直した教育システムこそ問題ではないか、あるいは家庭の問題だ、こつちこそたいへんなんだといいたくなる。しかし、それでは問題は何一つ解決しない。

先日、「小学校に入ったら、自由だの権利だのはないと子ども達に言い渡すべきだ」という発言に出

会った。こう思っている人は少なくないと思う。私はこういう発言に弱い。それはまちがっていると思うのだが、どう反論していいか、糸口がつかめない。それと同時に言ってもむだだという思いがして、つい口をつぐんでしまうところがある。

何がまちがっているのかというと、基本的に力で子どもを従わせようとするところだ。権力主義は決して相手を理解しようとはしない。なぜ、その子が自分の要求する行動をしないのか考えようとせず、相手や自分の思うようにすることだけを考える。たとえ動機や目的が「それがあなたのためだ」というものであっても、方法論が間違っている。相手の意志や感情を無視している。それは支配そのものだ。教育の鬼門ともいえる。そのやり方が相手をつぶす。人として生きて

いく上で、もっとも大事な自尊心と、自分で判断する能力を奪う。そしてそれが本人の意志を無視したものであれば、その子は、自分を捨てて生きるしかない。時には意欲や感情まで捨てる。意欲や感情を奪われた人間は、他者のそれを認めることができない。

大人が子どもの意志を越えて力を使ってもいいのは、あるいは使うべきなのは、生命が危険な時だけだと私は思う。

子どもの意志と大人

子どもの意志を尊重してと言うと、「甘い」と言われる。違う。とんでもない。子どもの意志を尊重するとは子どもの言いなりになることではない。子どもの意志や思いと自分の思いや意向を絶えず同等に検証することだ。甘いどころではない。何度も自分

分が問い返される。自分が望んでいることは正しいのか、していることは相手にどういう意味を持つのか、自問していなくては



ならない。このことをわかってもらうにはどうしたらいいのか、自分はそれをわかっているのかを問い、時にはあきらめなければならぬこともある。自己を不問にし、つべこべ言わずに言うことを聞きなさいと言っている方が、よっぽど楽だと思う。

私は、自分の子どもとの関わりを通してこれを体験した。子どもの思いを知ることには楽しみでもあったが、また、子どもと自分の考えや感覚が違うことに気付くたびに自分の考えを相対化させられてきた。親の不安を先行させて、一方的に命令してしまい、あとで泣いて謝ったこともある。しかし、謝ったことで親子の関係は悪くはならず、むしろ前進した。

保育の現場でも、その子を信じてあたると、子どもが全力を出して応えてくれるということは何度も見た。子どもが自分で判断する。反対に、相手の気持ちを無視して、こちらの言うとおりにさせようとしても、逃げられてしまう。

保育者の資質は感性だとよくいわれる。表現のつた

ない幼児の気持ちを理解することを重要視するからである。教師の資質においてその点はどれだけ重視されているのだろうか。むしろ子どもに言うことを聞かせるスキルだけが評価されているのではないか。学校は公権力だと言ってしまうまでもいいが。それならば、あんなに拘束させられては、子どもはたまらないと思う。

学校が楽しいのは、先生と友達が心を通わせて様々なことをし遂げるところにあると思っている。その力をもっと大事にしていきたいと思う。この論考の最初に、学校は子どもと大人が生活するところ、その中で様々な文化や知識を伝えていくところと切り換えた方がいいのではないかと書いた。それは今でも変わらない。我が子にどんな子ども時代を送らせてやりたいかと考えれば、一日一日がそのまま充実した日々であってほしいということである。悲しいことや苦しいことが起こっても、それを友達や先生と共に乗り越えられるれば、生きていく力になる。土台さえ作れば子ど

もは持つて生まれた力でのびていく。

力関係からの脱却

「学級崩壊現象」は、家庭が原因でも幼児教育が原因でも小学校でも中学校でもないと思う。現代の大人と子どもの関係が力によるものであることが原因だと思
う。

「自由保育」が非難されるのは、ほかのところできちんと（？）やっているのに、そこだけが権力的でないで、崩れたのだという論理だ。子どもに拒否権を与えてはいけないという考え方だ。全部を一貫して、大人優位でやればほころびないというわけだ。筋は通っている。しかし、逆の論理も成り立つ。ほかのところの権力主義が、自由保育を体験することで、破綻をきたしているのだと。

実はお気づきのように、ほころびているのは学校だけでない。家族が今、ほころびているのである。力による親子関係のもとで育ってきた子ども達が成人し、

家庭を持ったときに、あるいは子どもと直面したときに、人間としてのしなやかさが消えてしまっているという問題だ。

この間、子どもと暴力をテーマにした書物を何冊か読んだ。読みながら、子どもが暴力をふるうよりも、暴力をふるわれていることの方が深刻なのだということを改めて、認識させられた。

大人はたまに子どもに暴力をふるわれると、声高に叫ぶ。私もその一人かも知れない。子どもに底知れない悪意があるのではないかと不安になる。しかし、現実には、その何倍もの悪意が子どもに向けられている。としたら、子どもが大人に底知れない不信感を抱



くのは当たり前ではないか。

だから、ああだこうだと子どもを論評する前に、大人の権力主義を払拭する方がこの解決には結びつくと思う。子どもとの共存を心底願うこと、自分の思いのままに子どもをし向けるという、親権力・教師権力を脱却する必要があると思う。

子どもによりそえるように

なぜ、教師は権力を必要とするのだろうか。それはひとりの教師がおおぜいの子どもに、一度に同じことを伝えなければならぬからだ。伝えることが多すぎ、それを年中していなければならぬからだ。困っている子どもがいると気付いても、ほかの子ども達がいって授業をやめるわけにはいかない。それを繰り返して、クラスで授業についてこれない子が何割かいるという常態は空しい。ドキュメンタリー番組で、クラスを抜け出す子どもに、授業がわからないのなら、静かに自由帳でも書いていればいいと先生が言っていた。

静かにしていさえてくれたらいいというのだろうか。ほんとうはこの子に誰かついて教えてやってほしいと思っっているはずだ。子どもだってその方が満足するだろう。学びたいし、知りたいと思っっているのだから。

文部省は、学級崩壊の大きな要因として、教師の指導力を上げていた。あまりに硬直化した子どもへの指導が原因であると。確かにそうかもしれないが、そうしなければやってこれなかった教師の状況というものも背景にあると思う。それでなんとか今まで持ってきたのだ。それが今、現代の子ども達に合わなくなってきたている。

日本は経済大国だというのが、日本の教育はまだ貧しいと思う。幼稚園では、三十五人の子どもを相手にひとり保育者は走り回っている。今の水準を下げたくないと言うのなら、教師や保育者の数は少なくとも倍は必要だと思う。学校の学びのスタイルをもっと柔軟にしていく条件がほしい。教師の教えの発想も豊かにし

てほしい。その条件を整えなければ教師も成長できない。私のところには、教師希望の学生が大勢いる。その夢が無惨にも破れていく姿を毎年見るのは忍びがない。教育にお金と人をつぎ込んでほしい。子どもが少なくなってきたから、教師はいらないなどとはいえない。これだけ子どもが育ちそびれているのだから、専門的に子どもに関わる人はもつともつと必要だ。これはもう社会的合意になっていると私は思う。

子どもの攻撃性を考えながら、最後にたどり着いた結論は、問題を一般論としてとらえるのではなく、具体的にその子どもに寄り添って理解し、支えていくを増やすこと、その体験を語り合えるようにしていくことが、今最も必要だということである。

(山口大学)

参考文献

- (1) 森田ゆり『子どもと暴力―子ども達と語るために』岩波書店 一九九九年
- (2) 山崎晃資編『子どもと暴力』金剛出版 一九九九年
- (3) 保坂渉『虐待―沈黙を破った母親たち』岩波書店 一九九九年
- (4) 齋藤孝『ムカツク』構造』世織書房 一九九八年
- (5) ビエーロ・フェルツチ著 泉典子訳『子どもという哲学者』草思社 一九九九年
- (6) 本田和子『変貌する子ども世界』中央公論新社 一九九九年
- (7) 村田陽子・友定啓子『子どもの心を支える―保育力とは何か』勁草書房 一九九九年

幼児のコミュニケーション

―保育の現場から考える(1)―

田中三保子

昨年度、三年ぶりに三歳児クラスの担任になりました。入園式のあと十日ほどは、とても静かでした。母親から離れられなくて大泣きする子も、もめごとを起こす子もいませんでした。一人ひとりがその子なりに遊び出し、片づけも積極的にしてくれて、ほとんどなにごともなく一日が終わっていきました。それぞれが自分の好きなものに黙々と取り組

み、遊具の取り合いになりそうになると、「いいよ」と一方が譲ることさえあります。それがあまりにも自然で、我慢をしているようにもみえないのです。全体にひっそりと、声もなく遊んでいる様子からすると、どの子も、初めての環境でそれなりに緊張しているのは分かります。緊張のゆえに今は抑制がきいていて、ぶつからないでいるだけなのでしょうか。

今までの私の体験からは考えられない光景でした。

A夫と子どもたち

入園式の日、A夫は母親にくつついてめそめそしていました。翌日からは、母親が見える範囲にいれば、汽車やブロックなどに手を伸ばして遊ぶことができ、少しずつ行動範囲が広がっていました。十日目、「本人が玄関でいいと言ってますから」と母親は保育室から出ていきました。A夫はそれまでと変わらない様子で遊び続けています。よかつたと思ったのもつかの間、A夫は積み木を蹴とばしたり、ブロックを投げたりし始めました。遊んでいる子どもを後から押し倒したりもします。それまでの気弱な様子とは違って、消化しきれない何かを吐き出しているように見えました。それから毎日、A夫は突然誰かをたたいたりして、彼が室内にいるときは、私は心配で外へ出られなくなりました。周りの

子どもたちはといえば、たたかれたり邪魔されたりしても、目に涙を一杯ためている程度なのです。よほどでなければ大声を出さないのです、私もすぐには気がつかないこともありました。

A夫の行為を止め、相手がいやがっていることを彼に伝え、相手を慰めたりしながら、私は、もしかしたらこの子どもたちは自分を表現する方法を知らないのではないか、それ以前に、自分が何を表現したいのかも分かっているのではないかと思うようになりました。初めの頃、A夫のほかには、相手の領分にずんずん押し入っていく子どもがいけないこともあったのですが、ものをとられても遊びに侵入されても、相手を見ているだけで、しばらくするとまた元の遊びを続ける子どもが多いように感じました。いやな目にあつたときに子どもはよく泣きます。泣くことは、相手に対するいやとかやめてほしいというひとつの、それも原初的な感情表現、意思

表示のしかたではないかと思うのですが、それもしないのです。自分を抑え他人に合わせることを自身に強いてきたために、本当は泣きたいのに泣けないでいるのかしらと考えるもみたのですが、それにしてはどんどんとよく遊びます。この世に生を受けてたかだか三年ちよつとの人たちです。まだ状況を讀みとれなくてあたりまえです。緊張が解けて状況も分かってくれば、少しずつ自分を表現できるようになってくるのではないかしらとも思ったのですが、やはり少し違うような気がします。初めての体験に戸惑っているのは分かります。でも、自分が相手に何を伝えたいのか、それを伝える適当なすべは何か分からなくて何もできないでいるのではないかと、私には感じられたのです。

B子とC夫

五月の連休明けのある日、私は保育室から山（園

庭の隅の小高いところ）へ行こうとしていました。何度も誘われていて、やっと行かれるようになったのです。前方でC夫とB子がやりとりしているのが見えます。B子はこちらに背を向けていて表情が分からないのですが、どうも様子が変です。私が行くと、B子の顔は引きつっていて、C夫は困ったような顔になりました。C夫は少し前からB子に関心があつて、手をつないだりかまったりしていました。きょうは、どうやらだんご虫取りにB子を伴いたかつたようです。B子は手を引っぱられて、身体で抵抗して行きたくないことの意味表示をしていたらしいのですが、それはC夫には伝わっていないようでした。「Bちゃんは、いやつて言ってるみたいよ」。私はB子の気持ちをC夫に何度も伝えます。B子が不安そうなので一緒に保育室に戻りましたが、B子は身体をかたくして動けなくなっていました。自分の意志に反することを無理矢理させら

れたことが、かなりのショックだったようです。C夫の方は、B子と楽しいことを一緒にやりたかっただけ、いけないことをしたわけではないと思つていようで、そのあとも、何度もB子を誘いに来ました。B子の気持ちを伝えても分かつてもらえなくて、誘われるたびに、B子の顔が引きつっていきました。

B子は、C夫だけでなく他の男の子にも年長児にも人気があって、遊びに誘われたりかまわれたりすることが時々ありました。B子がそれをどう受けとつているのか私は気になっていました。時折B子の表情をうかがうのですが、応か否かが読みとれませんでした。おそらく、もっと前からいやだと思つていたのでしよう。どんな形であれ、B子がいやという気持ちをもう少し表現できていれば、こんなに怖い思いをさせないですんだのにと、私はB子のこわばった身体を抱えながら思いました。

C夫は、B子がいやがって手を後ろに回しているのに、何も言わずに、その手を取ろうとしていました。一緒に行こうとか、山に行こうとか何か誘いかけることばがあれば、B子も首を振るなりいやと言ふなり、もう少し明確な意思表示ができたのではないでしようか。

人とかかわっていくには、自分の気持ちや考えを相手に伝えていくことがまずは必要です。それには伝えたいことが表現できなければなりません。表現の最も分かりやすい形がことばによるものだと思



ます。今までの生活環境の中では、ことさらにことばで表現しなくても、できなくても、親しい人同士お互いに分かり合えていたのかもしれませんが。でも、これからは、新しい環境の中で知らないもの同士親しみ合っていくために、それぞれが自分を表現し伝え合う方法、できればより効果的な方法を身につけていってほしいのです。保育者としてそのための努力をしていきたいと、このとき私は思いました。

「はけない、はかせて」

D子は入園早々から臆することなくどこにでも行って遊んでいました。面白そうなことを見つけると、年長児の中にも黙って入り込みます。思うようにならないといきりたつて、相手が誰でもひるみません。「せんせー、この子がね、勝手にしちゃうの」と年長児が私に訴えたりします。ほしいものが

あると、他人のものでも持つていってしまいます。

きけば、「だって、ほしかつたんだもん」とあつけらかんと答えます。悪びれるようすはありません。園庭に出ようとして、側に私がいると、自分で靴を履き替えようとしません。「はけない、はかせて」、立つたまま言い放ちます。ひとりの時は自分で履いているのですから、履けないわけではありません。

ほしいものやりたいことは、即、実力で手にします。「はけない」と言えば、他人は履かせてくれると思つていようです。素直といえども素直です。まわりがD子の意をくんでくれて、摩擦も起こらなかったのでしょうか。D子は、こうすれば自分の思いが実現するという体験を重ねて、D子なりの自己表現手段を身につけてきたのだと思います。

山でD子が仁王立ちしているのに行き会いました。側で年長児がごさを広げています。「Dちゃん、もしかしたらここに入れてもらいたいの」、私が尋

ねると、D子は頷きます。「きいてみた」。D子は首を振ります。「Dちゃんが入りたみたいなんですから、入っていい」。年長児は困ったように顔を見合わせています。D子には入ってほしくないけれど、言えないでいるようです。「きようはお姉さんたちだけで遊びたいみたい。また今度にしてもらっていいかな」、私はD子にそう伝え、「また今度遊んでくれる」と年長児にきいてみました。「うん」という答えが返って、「また今度遊んでくれるって。いいかしら」と私が確かめようとするまもなく、D子は走り去ってしまいました。

D子は入りたから入るを繰り返して、それだけでは必ずしも思いは通らないと分かってきたようです。でも、どうしたらよいかはまだ分かっていません。D子の思いをくみとってことばで表現してみたり、具体的なやりとりを示してみたりすることで、自己表現のしかた、コミュニケーションのしかたを

学びとってほしいと、このとき私は思ったのです。

さまざまな自己表現

誰かに何かを伝えようとします。その伝え方が率直であれば、真意は伝わりやすくなります。応にしても否にしても、相手は応えを返しやすくなります。そして、相手とのやりとりが成立します。D子の場合には、その意図がとて分かりやすかったといえます。ちよつと怖いので、年長児でも返事に詰まってしまったのです。そうでなければ、子ども同士でやりとりできていたでしょう。D子なりに、年長児の反応からコミュニケーションのしかたを学ぶことができたと思います。

表現のしかたが率直でない場合、相手は真意をつかむことが難しくなります。例えば、すねる、いじけるなども自己表現の手段と考えることができず。素直に思いを伝えることが何らかの理由ででき

なくなつて（素直に表現しても受けとめてもらえなくて）、すねたり、いじけたりして自分を表現しているのです。素直な気持ちの表明がそのまま相手に伝わっていけば、そんなまわりくどい表現をする必要はありません。すねたりしても、相手に分かってもらえるとはかぎらないのですから。

A夫の場合に、遊具を蹴とばしたり誰かをたたいたりするのも、彼なりに伝えたい思いがあつてのことだったのでしよう。思うようにならなくて鬱屈した気持ちを、例えばたたくなどの形で表出していたのだと思います。彼は相手に噛みついたこともありました。子どもが悔しかったり腹が立つたりしたとき、思わず相手をたたいてしまうことは、方法はともかく納得できないことではありません。けれども噛みつく、つねる、髪の毛をひっぱるなどの行為は、子どもの中から自然に湧きおこつたものとは言えないような気がします。自分がやられたり、誰か



がやっているのを目にしたたりして、自分を表現する手段として学びとつたものと言えましよう。A夫もよほど悔しかったのかもしれませんが。

四人のその後

初めのうちおとなしなかつた周りの子どもたちも、A夫にたたかれたり、せっかく作つたものを壊されたりすると、たたき返すようになりました。そういうとき、A夫はほんの少しの痛みでも泣き崩れてしまいます。相手の思いを伝え慰めても赤子のように泣き続けます。抱いたり、その手を引いたりしてA夫の気持ちが落ち着くのを待ちながら、私にもよく

分からないA夫の思いが、早く表現できるようになるといいのにと私は思っていました。結局、A夫が自分のことばで自分を表現できるようになるまでには十ヶ月かかりました。

三学期になると、A夫は表情が穏やかになって、力を使って思いを表現することはほとんどなくなりました。こんどはE夫が登園時に泣くようになりしました。あとで分かったのですが、一学期にA夫に理不尽にたたかれたことを、そのころになって強くいやと感ずるようになったらしいのです（E夫はたたかれても何もいえない子でした）。めそめそして私から離れられなくなってしまうと、急いで行かなければならないようなとき、E夫の靴の履き替えを待つていられなくて、私が飛び出してしまうと、決まってA夫が私の所にやってきました。「Eちゃんが泣いてるよ。せんせいがないって」と、E夫の手を引いて連れきてくれたり、知らせに来てくれたり

しました。A夫の穏やかな様子に、このときはE夫はいやがりませんでした。A夫はいつの間にか自分のことばで自分を表現できるようになって、相手にもそれがきちんと伝わるようになったのです。力でも思いを伝える必要がなくなったのでしよう。

B子は大きな瞳でじつと周りの様子を見ていることがよくありました。一緒に遊びたいと親しみを示しながら寄っていく子があつても、知らん顔をしたり、時には相手をたたいたりして、私を驚かせることがありました。自分のペースで自分の世界を広げていきたかったのですが、それを相手に伝えられなかったのだと思います。二学期になると人が変わったように積極的にになりました。いろいろなことに自分からかわり、大きな声でしゃべるようになりました。でも、三学期にはまた、寡黙で周りをじつと見ているB子に戻ってしまいました。クラスの子どもたち一人ひとりがよく見えるようになって

て、却って何も言えなくなってしまうたようでした。私に気持ちをくんで相手に伝えたり、相手との間を調整することが増えました。B子が自分を普通に表現できるようになるのは、四歳児クラスになってからです。

C夫はA夫とともに過ごす時間が増え、C夫自身もたまたたり壊したりする時を経て、自分で自分の世界を作る楽しさを味わい、自分のことばで自分の表現できるようになっていきました（この間の経緯については別の視点から『幼児の教育』第九十八巻第一号にまとめてみました）。

D子は相変わらず自分を率直に表現し続けていました。ただ、相手の思いや状況をきちんと伝えると、少し考えてから、納得して自分を抑制してくれることは増えていました。

三学期も終わりに近い日のことです。F夫が「Dちゃんと遊びたい」と何度も言ってきました。自分

ではなかなか言えないようです。D子は長いスカートをはきリボンのついた棒を持って、数人の女の子とバレエを踊っていました。かなり前からD子が熱中している遊びです。私は踊りの合間にD子に声をかけました。「Fちゃんが遊びたいって言ってるわ」。D子はちよつと首を傾げてから答えました。

「Fくんの気持ちはわかるけどね」。そしてリボンをひらひらさせながらF夫に向かって走っていきました。「あなたの気持ちはわかるけどね」。D子の声が聞こえてきましたがそのあとは分かりませんでした。おべんとうのあと、二人が楽しそうにお山で遊んでいるのを見かけましたから、交渉は成立したのでしょうか。D子は自分をてらいなく表出し相手とぶつかる過程を通して、相手にも通じるコミュニケーションのしかたを身につけていったのだと思います。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）



私が幼児教育を志した頃(4)

津守 真

人が青年期に、未開拓で未知の自らの将来に向かって、何を願ひ、何を志すようになるかは、そのときの歴史、社会の状況に規定されることは大きい。前に記したように、世界史の規模で起こった日本の敗戦の体験は私にとっては強烈である。しかし、それは話の半分で、他の半分は自分の中に幼少期から醸成され生涯にわたって成し遂げたいと願う個人的な願望で、それは青年期に至って明瞭になり、具体的な出会いとなって人生に用意されている。私の場合には子どもの仕事であった。言うまでもなくこの両者は互いに入り組んでいる。



西本願寺戦災浮浪児

戦後間もなく、空襲で親を失った戦災孤児が東京の町には大勢いた。昭和二十年暮れから二十一年初め頃、心理学科の学生は、築地西本願寺の浮浪児調査に動員された。焼けて曲がった鉄骨の中で寝そべっている子どもたちと面接するのだが、あまり答えてくれなかったし、私は毎日ただその中を歩き回って感想を書いて提出した。家に帰ると髪の毛から下着までシラミが糸を引いていて、当時できたばかりのDDTを一面にふりかけた。いまでは想像もむつかしいが、当時の東京はどこにいても浮浪児がいた。私はこの子どもたちとそれ以上かかわることにはならなかったが、子どもの仕事をするようになったひとつの動機ではなかったかと思っている。

今井館日曜学校—子どもに「おはなし」をする

同じ頃だったと思うが、先輩の山榑雅信さんから、今井館日曜学校を手伝わないかと私はお誘いを受けた。今井館は内村鑑三の聖書講堂で、内村の愛弟子であり横浜港の水先案内だった山榑儀一氏がお嬢さんの死を悼み、記念にそこで日曜学校をはじめられた。昭和十年頃である。当時一高生だった山榑雅信さんの「おはなし」が面白く小学生だった私はそこに通っていた。

戦争が終わり、昭和二十一年は、東京の町にはどこも子どもたちが溢れていた。私共は日曜日の午後になると、近所の神社の境内にいつて紙芝居をした。その中には今

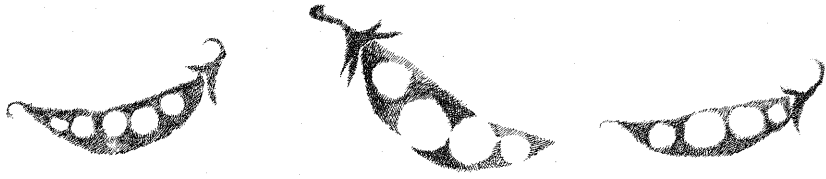


井よねの聖書物語十数巻が含まれていた。テレビもない素朴な時代だったから、たちまち大勢の子どもたちが集まって来た。「このつづきを見たい人は「こーい」と言うと、皆ぞろぞろと今井館までついて来た。よちよち歩きの子や妹も一緒に来た。こうして三十人も五十人も幼児から中学生の子どもたちに毎週「おはなし」をすることに なった。「おはなし」は面白くなければ子どもはすぐ立ち去ってしまう。面白いとい うのはおもしろおかしいとか、子どもを笑わせることではないということ、やっ てみるとすぐに分かる。子ども心に響き、訴えるものがなければならぬ。それは大 人の心に響き訴えるものと共通である。勿論、子どもに分かる言葉で話さなければい けないし、抽象的な語ではなくて、子どもが身近に触れ、容易に想像できる言葉でな いと聞いてもらえない。「お日様がぼかぼかと暖かく、猫ちゃんが屋根の上でひなた ぼっこしていました。」とか「三つの子のお兄ちゃんと一緒に、とことこ、野原 を歩いて行くと、黄色いお花が咲いていました。お花を摘もうかどうしようかと迷い ながら……」というような身辺ばなしを入れて、子どもたちの顔を見て話している と、子どもたちと呼吸が合ってくる。「おはなし」で重要なのは、私は何を子どもに 語りたいかというポイントが自分にはつきりしていることである。むつかしい理屈で はない。私自身が心のどこかで小さな感銘を受け、これを子どもに伝えたいと思うこ とがなければ「おはなし」にならない。この「おはなし」は後に私自身の子どもとの ふれあい（遊びや保育）にとつての原点にあるので、もう少し解説したい。今井館日



曜学校で話すのだから聖書の話が主になる。聖書には子どもの好きな話がたくさんある。

たとえば羊飼いの少年ダビデの物語である。予言者サムエルがベツレヘムの町有力者エッサイの息子たちの中から王にふさわしい人を選ぶ場面がある。長子のエリアブは背も高くハンサムな軍人である。サムエルはこの人こそ王にふさわしい人だと思ふ。すると主（神）が言われる。「顔かたちや身のたけを見てはならない。わたしはすでにその人を捨てた。わたしが見るところは人とは異なる。人は外の顔形を見、主は心を見る。」（サムエル記上十六章七節）。こういう部分は聖書のことばそのまま子どもに通用する。子ども用に言い直す必要はない。自分で暗記するほど何度も読んで考えておけばよい。こうして七人の兄たちが次々にサムエルの前を通るが、いずれもこの人ではないとサムエルは言う。このあたりは子どもたちの顔を見ながら話すとき、子どもも口をはさみ、大人も一緒に意見を言える部分である。そして最後に「あなたの息子たちは皆ここにいますか」とサムエルが問い、「まだ末の子が残っています。羊を飼っています」とエッサイとの問答があつて主人公のダビデが登場する。文語体聖書によればダビデは「色赤く目美しくしてその貌（かたち）麗（うつくし）と記され、新共同訳だと「血色がよく、目は美しく姿も立派であつた」となっている。色が赤く目が美しいとはどういうことだろうと問えば、子どもたちはすぐいろいろなことを言い始める。聖書の記述はきまこまかく、その中に人の生き方がち



りばめられている。こうしてダビデ王が敵の勇者ゴリアテと戦うときの祈り、サウル王からねたまれ、追われて逃げるときの王への忠誠の物語などひとつひとつ語ってゆくと何週間も何か月もかかってしまう。子どもたちは紙芝居も好きだが「おはなし」の方がもっと好きなように思えた。語り手も紙芝居では絵の裏に書かれている文字や絵にとらわれがちである。「おはなし」ではその場で子どもと大人との間にクリエイティブな空間が生み出される。子どもは溜め息をつき、「それからどうしたの?」と尋ねる。私はこの「おはなし」を通して子どもと付き合うコツを知ったように思う。小さい幼児のために、床には積み木も用意してあった。

大学生の期間を通して、私の生活は毎週日曜日の子どもたちと過ごす時間を中心に回転していた。昭和二十一年三月から、その同じ場所で矢内原忠雄先生の聖書講義がはじまった。これは私の魂の糧で、休まずに出席した。先生の講義が昼に終わると、玄関の扉の前に子どもたちが押しかけていて、扉が軋んで音を立てていた。扉を開くと腕白な男の子たちが飛び込んで来て、先生がまだ講壇におられるときから、壇の上走り上がった。私は必死になって止めるのだが子どもたちの方が早かった。いつも私は冷や汗を流していた。聴衆のなかには躰が足りないと思った人もいたかもしれないが、矢内原先生はこういう子どもたちを叱られたことは一度もなかった。腕白な男の子たちの傍にはいつも小さな幼児たちがうろろうろしていたからかもしれない。先生



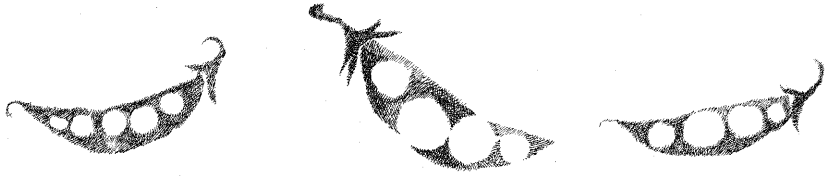
は講義のときに私語する人には鋭い目を向けられ、ときには講義を中断して注意されることもあった。けれどもその厳しさの中に、柔和な優しい目があり、そのことは聖書講義の中にも滲み出ていた。私が子どもたちにダビデのおはなしをしていた頃、先生の聖書講義は同じ箇所、サムエル記だった。ダビデ王の晩年、息子のアブサロムが反逆し、ダビデ王はエルサレムの城を出て、ケデロンの谷をオリブ山へと逃げる。

「ダビデはオリブ山の坂道を登ったが、登るときに泣き、その頭をおおい、はだしで行った。」と聖書には記される。ここを講じながら、先生も泣いておられるように思えた。先生は語られた。「人生に於いて、泣きつつ坂を上る経験は真に痛ましい。

……日が暮れて既に暗くなつた後、私は疲れ切つた身体に悲しめる心を包んで、陸坂を登つて来た。坂の中ほどの十字路まで来て息が切れ、そこで立ち止まって星を仰ぐ。……幾度も立ち止まりながら泣きつつ登つた。その涙が私を神に親しませた。」

(矢内原忠雄全集第十卷五九三頁)。へ矢内原忠雄は昭和十二年に「国家の思想」という論文が戦時に平和論を説いたというので軍部ににらまれ、社会問題となり、東大を辞職された。そのときの心境がここに反映されている。)

結局息子アブサロムは森の中で木の枝に引つ掛かり悲惨な死を遂げる。ダビデは息子の死を悲しみ、「わが子アブサロムよ、わが子、わが子アブサロムよ。ああ私が代わって死ねばよかつたのに。アブサロム、わが子よ、わが子よ」と詩をつくる。このアブサロムの反乱には、ダビデ自身にも原因があった。ダビデの涙は自分の過去に対



する反省をもこめたものであった。羊飼いの少年時代から王になるまでの物語を学んで来た者は人間の一生を考えざるをえない、だれにも共通の物語である。子どもにその通り話すのではないが、大人として両者に共通の人間の真実を考えておくことが「おはなし」を前向きに面白いものにする。この長い「おはなし」を終えたときには、子どもたちの間にも静かなひとときがあったことを私はいまも覚えている。あのと子どもも人間の一生をイメージしていたのだと思う。

「おはなし」が終わると、山榊さんの姉妹がおやつを用意してください。それから子どもたちは分団に分かれて絵をかいたり、切り紙をしたり、道路でドッジボールをして、夕闇の中でボールが見えなくなるまで遊んだ。私は二、三歳の小さい子どもとよく玄關前の石段に腰をおろして座っていた。「おはなし」の後には黙っていても子どもが子どもと触れ合う感覚を知った原体験である。後に、当時の幼稚園の一斉指導で子どもが満ち足りた生活をしているのだからかと疑問をもったのも、このような原体験に照らしていたのだと思う。

楽しく作る 汗して作る

古谷 久美



アイガモ農法の『米作り』

春、田植えも終わりに近づく頃、生まれたてのアイガモのヒナ達が我が家にやってきます。生後すぐに水に慣れていくことが、ヒナ達の最初の仕事。ヒナ達は約二週間の間、水浴びを繰り返しながら、水をはじく羽になり、体付きもすっかりとしてきま

す。

その間、田んぼの苗も少しずつ根を張り、葉を伸ばしていきます。そんな様子を見ながら、私達は、各田んぼの周りに網を張り（Ⅱカモが外に出ないよう）、電気柵を張り（Ⅱカモを狙う犬などが入れないよう）、田んぼの上には糸を張り（Ⅱカモを狙うカラスが降りてこられないよう）、準備をします。

そしてヒナ達が田んぼにデビューします。ヒナ達は、広々とした新天地をのびのびと泳ぎ廻りながら、飛んでくる虫や泥の中の小さな生き物を食べ、雑草をつつきまします（不思議なことに、アイガモは、稲はつつかないようです）。そのお陰で、アイガモのいる田んぼでは、農薬や除草剤を撒く必要はありません。そして、それだけではなく、アイガモが泳ぎ廻って稲の根元に刺激を与えることで、がっちりとした丈夫な稲になり、更にアイガモのフンは、最高の天然有機肥料となります。つまり、アイガモの田んぼでは、無農薬有機栽培のおいしいお米が収穫できるのです。

稲はぐんぐん大きくなり、アイガモ達もぐんぐん大きくなります。夏を迎える頃には、稲はアイガモ達の心地よい日除けとなってくれます。稲の茎の中から穂が芽生え始めると、アイガモ達を陸に上げます。アイガモは、稲の穂をつついてしまうからです。稲刈りが終わり、秋から冬へと寒さが増す中、

アイガモ達は脂ののった肉質となり、食されることになります（生まれた時から毎日世話をしてきたアイガモ達、田んぼでスクラム組んで健気に働いてくれたアイガモ達に思いを馳せ、心から感謝しながら、その「生」をしみじみと頂きます）。

アイガモ農法のお米作りには、一般栽培の粹を超える柔軟性と広がりがあります。これまでお米しか作っていなかった田んぼが、アイガモ達の格好の生活の場となります。厄介者でしかなかった雑草や害虫がアイガモ達のエサになり、フンとなって、おいしいお米を作ってくれます。生き物を育てていく楽しさや大変さ、自然界の命の巡りの現実、そして、人間は他のたくさんの命を頂きながら自分の命をつないでいるという実感……折りに触れ、様々な発見や感動があります。楽しく、おいしく、奥の深いお米作り、それが私達にとってのアイガモ農法です。

有機農法と『土作り』

一粒の種モミが、内なる芽を出し、根を生やし、茎を伸ばし、葉を広げ、穂を育み、やがて百粒余りの穂を実らせていく……そんなドラマを支える陰の主役が『土』です。

有機農法では、この大切な役割の土をどのように作っていくかが重要なポイントです。土の中には様々な微生物が棲んでいます。微生物達は、タンパク質を主原料とした有機質を食べ、ミネラル等の微量元素を放出します。この微量元素が稲の根を元気にし、お米がおいしくなる栄養素を根に与えます。良質な有機質を入れてじっくりと土を作り、土中の微生物の働きを活発にしてい、これが有機農法の基本と言えます。

化学肥料や農薬に頼った農法は、一つ一つの事態に対応していくだけの対症療法になります。有機農法では、ひたすら、稲の「生」の力を信じてい

ます。稲が本来もっている「生」の力をそのままに十分に引き出せるように環境を整え、健全な稲を作っていきます。病害や虫害、悪天候に見舞われても、有機農法の田んぼの稲は、他に比べてダメージが少なく、力強さとしなやかさが感じられます。

秋、刈り入れの終わった田んぼの土は、乾いた淡い匂いがします。冬の間、田んぼには堆肥や米ヌカ、骨粉、魚粉などの有機資材が丁寧に混ぜ込まれ、じっくりと熟成していきます。春めいた陽射しに霜が溶け始めると、土は黒々と光り、何とも言えないふくよかな匂いが立ちこめます。作物を育む大地の「いのち」に満ちた奥深い匂い、「土が生きる！」と実感できる大好きな匂いです。

農家の暮らしと『作る』ということ

農家の暮らしをしていると、身の回りの何でも道具や材料にして、必要な物を作り出していく手際の鮮やかさに、しばしば驚かされます。

例えば土は、作物を育む役割だけではありません。土を掘り起こしてビニールハウスの裾に乗せ、足でギュッギュッと踏み固めれば、強力な重しになります。土をビニール袋に入れ、それで田んぼの用水の出入口をふさいだり開けたりして、田んぼの水の量を見事に調整します。裏山の竹を切り火であぶって曲げればビニールハウスの押さえになります。田植え仕事の合間にセリをとって、それが夜のおかずの一品。小枝拾いをしながらとった山菜も、仕事の傍ら七輪でコトコト、これもおかずの仲間入りです。

お金を出せば便利で快適な生活もありますが、今身近にあるものをどのようにしていくと生活の役に立つかを考えて、効率よく手を動かしている姿が多く見受けられます。生活者としてのたくましさ、安定感に満ちた頼もしい姿です。

手を動かし、或いは体を動かして生活に必要な物

を『作る』という行為は、現代の日常生活の中でどの位の割合を占めているのだろうか、ふと思えます。自分の体を使った実体験よりも頭の中で観念的に物事を操作したり、『作る』よりも『消費する』方に偏ったりしている姿が目につきます。そして、極端な場合には、『作る』よりも『壊す』方向へと走ってしまう……もやもやとしたやるせなさ小さな子ども達の中にも感じられます。

我が家には、「農業体験をしたい」と時々、お客様が訪ねていらつしゃいます。小学生から年配の方まで、皆さん体を動かし、汗をかき、「あー、疲れたー」と気持ち良く言うその顔は、柔らかく生き生きとしています。

体を動かして物に働きかける、その手応えを五官で鮮やかに感じ取る、その実感や発見の感動が心地よい充足感となって体中に広がり、活力となっていく……。現代社会を生きる私達にとって『作る』という行為は、計り知れない力を与えてくれるのでは

ないでしょうか。そんなヒントの一つが、農家の暮らしの中にあるように思われます。

(千葉・セイダイ農場)

小児病棟と中学校での

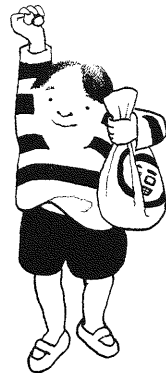
『空間』『づくりから』

倉田 知子

小児病棟での『空間』づくり

親や先生など直接的な存在以外に、ほどよい距離で自分を大切に見守ってくれる大人の存在、その大切さに注目して取り組まれている二つの『空間』づくりについて考えていきたいと思います。

ある小児病棟のプレイルームに、大きな紙袋を提げた、先生でも看護婦さんでもお母さんでもないエ



ブロン姿の私たち（二名交代）が登場することから、その『空間』は幕を開けます。パジャマ姿の子どもたちが手には手に点滴をしたまま、「今日はどんなものがあるかな」と袋の中から材料をひっぱり出し自分のイメージを膨らませて工作を始めたたり、絵本を読んでもらったりとそれぞれが自分のしたいことを始めます。私たちは彼らの気持ちが出来ただけ満足のいくように援助して時間を共有します。

（この病院内保育ボランティアの活動は、お茶の水女子大学児童学科同窓会「ジネット」の会員の希望が、ある小児精神科医の「小児病棟を子ども村のようにしたい」という願いと重なり実現したものです。今まで十三名が参加しました。）

この『空間』を創っている姿勢は何でしょうか。「いつも」とは「違う時間の流れ」を感じて欲しいという願い——先生でも看護婦さんでも親でもない私たちは病気のことは殆ど知りません。そんな存在

の私たちと居るということは、子どもたちの心が「日常」とは離れて「今、この時」を感じ、楽しさで体を満たすことができることにつながります。それはすなわち、「遊びに没頭する」という行為により、自分を「病気」というくくりから離し、自分に潜在している力とゆつくりと戯れ、時にはその力を表現できるということです。

発達の連続性を見守る——信頼感安心感のある『空間』の中で——この様な『空間』において子どもは、病気ということでも途切れはしない自己の連続性（発達の連続性）の中に身をおくことが保障されます。すなわち子どもたちは「病気の自分」ではなく「成長の過程としての自分」を感じることが出来るのです。私たちは、「見守る者」として、常に子どもとの信頼関係を大切にし、また外に現われた行為にいつもその裏にある気持ちを感じ取りながら、自然体で接することで子どもが大きく息を吸える『空間』にしたいと思っています。

中学校での『空間』づくり

その『空間』は、中学校内の一隅、赤いギンガムチェックのカーテンとクツション、ソファ、ぬいぐるみ、数冊の本、数点のゲームや手芸用品等を邪魔にならない程度においた空き教室に、「先生」でもなくお母さんでもない、生徒たちが自分勝手に呼び方を決められるような存在の私（いわゆる「相談員」という立場）が行くことによって幕が開けられます。この『空間』に来る子はどんな子であってもこの場を必要としているのだという想いのもと、広く門戸を開き、かつ深く付き合える『空間』を作ろうと思いました。そんな想いが、「ここって落ち着くね」「ここに居ると学校か家か判らなくなる」という生徒たちの声になって返ってきます。

この『空間』を創っている姿勢について考えました。

『間』を大切にする——思春期においては、自意識が高まり、他人の評価が気になる分、疎外感を多く感じたり、理想と現実とのギャップに苦しむことがあります。そもそも思春期だけに限ったことではありませんが、変化（成長）というものには時間がかかります。

例えば、しばしばあることですが、三年の間には気のあう仲間（グループ）は当然変化します。ある仲間関係が崩れて新しい関係に移行する時、その子は失っていくものへの不安と先行きの不安の渦の中にいて、時には「……された」と被害感を多く感じやすくなったり、一人ぼっちになってしまったような感覚を味わいます。そして、更に複雑なことにはそのような時、今までの人生で味わってきたような経験が重ね合わされ、「またあのような辛さを味わったらどうしよう」と、整理されていなかっただけの気持ちの吹き出し、今とダブって揺れを大きくします。そんな時、揺れている今の気持ちを大事に

思い、じっくりと自分の「生」を整理できる『空間』でありたいと思っています。

またそれは例えば、自分の心の中にずっと溜めてきた気持ちをどうしても抱えきれなくなった、そんな時にこの場で思い切つて出してみる、すると口から出したことで何かが自分の中で変化するそんな『空間』でもあります。

成長とは決して一直線ではなく行きつ戻りつらせん状に進むもの。何かが変わるまでの『間』は混沌としていて、時には大人にとって否定的に見えることであるかもしれません。でもその『間』は、充分にその子の中に確実なものが育つまでの「可能性を秘めた時間」であるということを確認し、子どもの揺れに付き合い、しかもその揺れに動じず、その子のエネルギーを大人として大枠のところまで真摯に受け止める——「豊かに悩む」——その事を見守っていきける『空間』でありたいと思います。

学級でもなく、家庭でもない「中間的な空間」で

ある——それは即ちその子を取り巻く価値観、評価からは自由である『空間』として存在する——そのことに意味が在ります。子どもの側からいえば、自分に必要な関係を自分のイメージで創っていきける、新しい自分を演じてみることができるとんな場です。それは、母親や先生という直接的な、「なくてはならない」関係ではなく、自分から選べる関係だから出来ることでもあります。しかもこの『空間』では、そのことについての評価は気にせず、安心して話すことが出来るのです。（昔は、ある意味では、地域社会がこの役割を担っていることができました。）

*

「生の貧困」という言葉に今の子どもたちの状況が読み取れてしまうような昨今、子どもを早急に一つの価値観でくくらずによりしなやかなに生きることを保障する大人が存在し、子どもたちが安心して立ち止

まれ、ゆったりと多様な生を試すことができる、そんな『空間』が多くの子どもの周りに創られる

ことが、子どもたちの未来を豊かなものにするのではないでしようか。
(東京都文京区在住)

豊かな自然が私の原点

金井久美子

内モンゴル・哈拉薩（ハラサ）にて

夕刻、寝台列車で北京を出発、中国内モンゴル自治区第二の都市包頭市へ向かう。翌朝駅に着き、さらに乾いた大地の中をバスで走り続けること四時

間、オルドス高原に位置する人口一万人の町、伊金霍洛（エジンホロ）旗、哈拉薩（ハラサ）へやっと到着です。この地へは年に四、五回、地球緑化センターの植林ボランティアが訪れますが、町の中を緑のバンダナをして歩いていると、現地の人々が「日

本人がまた木を植えに来たの？」と親しげに声をかけてきたり、時にはお茶をどうぞと自宅に招いてくださることもあります。

三十二回目となる今回に「緑の親善大使」の参加者は十代から八十代までの男女三十名。真夏の炎天下、いよいよ植林作業の開始です。三、四年ものの樟子松（赤松）の苗木を現地の人達と一緒に植えます。「何か人の役に立ちたい」「中国で木を植えてみたい」「環境について考えてみた」等、このボランティア活動に参加した三十名の動機はさまざまです。八日間の植林作業を終え、広大な大地に植えた木が元気に育つようにとの願いを込め植林地を後にしました。

日本に戻って二日目、「緑のふるさと協力隊員」として全国の町村に派遣された十七名が東京で合流。昨年四月、中間研修を終え不安そうな表情で各地に向かった隊員が、半年振りに全員集合。日焼けした顔がとてもしょく見えます。この「緑のふるさと



▲ハラサ砂漠で植林作業をする「緑の親善大使」の参加者たち

協力隊」は、山村で農林業や村おこし事業を手伝いながらさまざまな体験を重ね、山村について理解を

深めると同時に、自分の生き方や、社会、環境について考えていこうというものです。今回も、大学を出て教師になる前に応募した人や、もう一度自分の生き方を見つめ直そうとする人達が参加しました。

このボランティアに参加することで、今まで受け身で生活して来た人も自分自身で体得したものは何ものにも得がたい経験として、その人の将来の生き方に大きな影響を与えるように思われます。一年後には一人ひとりが心の糧としての第二のふるさとを得て、それぞれの道へ旅立っていきます。その姿を見ることで私は、それまでの苦勞をすっかり忘れ、嬉しい気持ちになります。

自然と遊んだ子ども時代

私は岩手の大きな農家で生れ育ちました。家では、麦蒔きの後や稲刈りの後は常に二十〜三十の人にご馳走をふるまうことが多く、私もよく料理を運んだり、お給仕をしたり、子どもなりに楽しんで手

伝っていました。決して生活は豊かではありませんでしたが、十三人家族の中で皆それぞれ役割を与えられ、辛いこともありましたが、今思うとみんな楽しい思い出です。

雪深い冬は、叔父達に教えてもらいながら作った竹スキーやソリで暗くなるまで遊び、春は雪どけの間からふきのとうや福寿草の花が咲き出すと、寒さから解放される喜びを感じました。また、秋には堆肥に使うため集めた落葉の山の中にもぐってみんなで遊ぶなど、わが家は近所の子どもの遊び場であり、いつも遊ぶ裏山の雑木林には私たちにとってたくさんの宝物がありました。幼い頃自然の中で体得したことは今でも心の中に深く刻み込まれています。私にとって、豊かな自然の中で暮らした経験は大切なものであり、現在の仕事の原点でもあると思います。

また、上京して間もない学生の頃、八百屋の店先に並んだ柿の前で食べたそうな表情で立っていると

友人から「柿が好きなのにどうして買わないの？」と聞かれたことに対し、「小さい頃、木に登って柿をもいで食べていたので、どうしてもお金を払ってまで買おうと思えないの」と言って大笑いされたこともそんな自然の中で育ったことに由来するのでしょうか。

緑、人を育む

今、自然環境は「SOS」を発しています。また、暮らしは豊かになりましたが、人の心は悲鳴をあげているようにも思えます。最近、NGO活動にさまざまな人たちが参加するようになってきました。参加した人たちの動機をみると、年代によって違いはありますが、みんな心の充足を求めていることが感じられます。十代の参加者は親に勧められ、二十代は将来の進路を模索しながら、四十代は別の生き方を求めて、五十代、六十代は定年後の生き甲斐探し、等々。

環境が地球にさまざまな問題を投げかけているのと同じように、私たち人間の心にもいろいろな変化が起こっています。今の時代、一方にどうにかしなければならぬ環境問題があり、一方に充足感を求めて活動したい人間がいる。地球緑化センターが掲げる「緑、人を育む」とは、一生懸命に緑を植えて育てることがすなわち人を育むという意味です。

ボランティア体験を通して自分を発見したり、学ぶことによって人は成長していくものだと思います。私自身も育った環境から多くの影響を受けてきました。植林ボランティア活動に参加してくださる多くの人たちとの出会い、また、緑を通じてのさまざまな分野の人たちとの出会いは大きな喜びです。今私は、家族も含めて多くの方々に支えられながらこの仕事ができることに誇りを感じています。

(地球緑化センター)

Kチエア

北村 俊道

私は幼い頃より絵を描いたり、ものを作ったりする事が好きだった。当時は、何かの遊びをする前にその遊びに使うものを自分で作らなければならなかった。その出来、不出来によって優位にたてるかどうかが決まってしまう。次はもつとよくしようとう工夫する。そのちよつとしたアイデアが友達のあいだではやったりしたらもうリーダーだ。

そのうちプラモデル作りにうつり、何度もいろいろ組み立てていくと、プラモデルのルールの様なも

のがわかってきて、説明書なしでも箱の絵を見ながら作れてしまう。空間の中での立体の把握ができ、ちよつとした幾何、力学的な事を体で覚えてしまう。教科書ではちつとも頭に入らなかったのに。

そういえば、太古の人類の生活はそれこそ「つくる」の積み重ねだったはず。狩りの前に矢を作り、獲物をさばく刃を作り、家族のために器を、寝床を、家を作った。その中でさまざまな工夫がされ続け、今の私達の生活を築き、これからも工夫はされ

続けられる。

しかし、今は自分で工夫しない。誰かが考えたものを使っている。今使っているものがこわれたら自分で直せない。仕組みが、まるでわからない。では子どもたちはどうなのか。与えられたおもちゃが、なぜこう動くのかわからない。わかりたいから分解すると、おこられる。こうして、そろそろ家の中もよごさない、服もよごれない、コンピューターでお絵描きする様になるのか。はたして体全体で楽しむ事が出来るのだろうか。

製紙工場の倉庫で山積みの再生角紙筒に出合った時、ワクワクするものがあつた。さつそく何か作ってみたくなつた。材木の様な形状だが、もともと紙なのでいろいろ思う様にならない。そしてようやく、小さなイスの試作品ができた。幼児用である。

前にも述べた様に、私は今の子ども達のおかれて
いる状況が、自分達の幼児期とかけ離れている事に



▲紙の筒がだんだん立体的のイスになっていく

危惧を覚えている。電子音と、デジタル画像があふれている環境。そこへ子ども達が魅きつけられてしまふのは、しかたがない事だと思いが、だからこそ、その前に肌や体で感じる遊びを体験しておいて欲しい。豊かな感性を体ごとぶつけてほしい。

完成した紙筒のイスを見ると、自分の中にあった子どもたちへの思いがあふれて来てこのイスに、世界中の子ども達が自由に絵を描いた展覧会はどんなに楽しいだろうと、夢みてしまった。さつそくいろいろ動いてみたのだが、うまくいかない。がっかり落ち込んでみると、ボストンの友人がボストンチルドレンズミュージアムの館長に紹介してくれた。そこで絶賛され、「必ず商品にしなさい」と強く背中をおされ、新たな展開に眠れぬ夜を何日も過ごしてしまった。

ダンボール色の簡素で、小さなイス。このイスに一体どんな商品としてのパワーがあるのだろうか。

ために、私の娘、真裕子と一緒にこのイスを組

み立ててみる事にした。小さい頃は私べつたりの娘だったが、このごろちょっと距離をおかれて、父親としてはさみしい思いをしていたところだ。彼女はとも興味を示して、紙の筒がだんだん立体のイスになっていく過程を驚きの声とともに手伝い、イスに絵を描く段階では、家で飼っていたウサギの絵を、唄う様な一人言をいながら楽しそうに描いてくれた。そのひと時は、私にとって、ひさしぶりに子どもとふれ合った楽しい時間と空間だった。

この経験から、このイスは「親子で『つくる』を楽しむ」ことが出来る商品として、私の頭の中で強く意識される様になった。

親子で一緒につくる事によって

1 発見（ディスカバリー） リサイクルしよう。すでにあるものを新しく生まれ変わらせる。

2 協力（コラボレーション） 力を合わせよう。

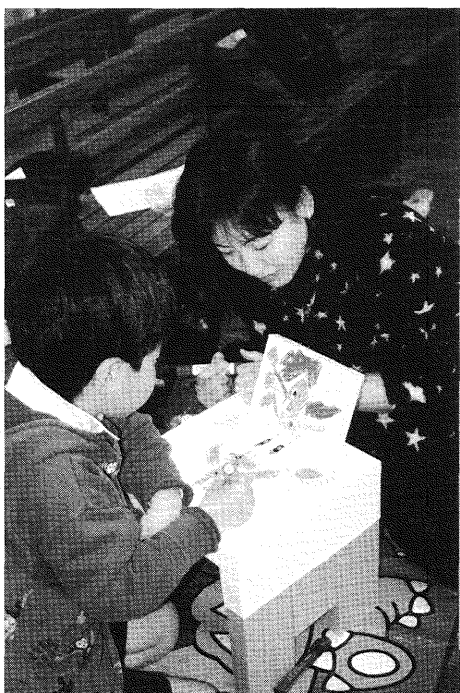
3 創造（クリエーション） 平面から立体へイメージを膨らませよう。オリジナルの絵を描こう。

4心（マインド） お父さんとお母さんと一緒に作った特別なイスは、大事に使う。

5記憶（メモリー） 子どもには楽しい時間の思い出、親には、このキズ、この汚れが「僕はこんな子だよ」と呼びかけてくれる。

という五つの要素を共に体験する事ができる。私はそれを、ファミリーエデュケーションと呼び、子どもはもちろんだが、親も色々な事が学びとれる教材の一つとして考えている。

自分の描いた絵のついているイスが、家の中にあることによって、幼児が自分のテリトリーを確保し、そこで安心して自分の世界を広げていく。その事がその子の自立の第一歩につながると思いい、この簡素なイスの計りしれないあたたかさを発見したのです。



▲組み立てられたイスに絵を描く

これが「ちよっとつくってみよう」から始まり「つくる」にこだわってそれを商品化してしまった「Kチエアー」のストーリーです。

大阪キッズプラザ、都内百貨店の手作りイベント、国立校の幼稚園での卒園イベント等で、おおよその親子さんに集まっていただき、イス作りをする場に私も御招待いただくことがあります。そこに

は、二時間程の「つくる」時間を共有する、親子のほほえましい姿が、くりひろげられていました。

まるで、昔し昔しの親子の様に。

(株)シエバル

児童館の露天風呂作り

宮里 和則

夏。滝王子児童センターの庭。子どもたちは穴を掘っている。大きな穴だ。スコップで掘ると、米屋さんからもらった袋に土を入れ土嚢を作っている。

露天風呂を掘っているのだ。その横ではドラム缶風呂。煙がもくもくあがっている。恒例になった夏休みの最後のイベント、露天風呂

作りである。

毎年のように通ってくる子もいる。

温泉みたいー露天風呂の始まり

それは数年前、たき火の後のことである。灰や燃え残った木を片づけ、庭を掃いていた。

Mちゃん（三年）がさつきまでたき火があつたところに水をまいた。

すると、シューウツと湯気が上がり、水が一瞬で沸騰した。

「わっ」と歓声。

「温泉みたい!!」

確かに何も無い地面から、泡が立ちお湯になる姿は、温泉である。

「温泉作りたい」

「温泉掘ってみたい!」

そして穴掘りが始まった。何日もかけ穴が掘られた。雨が降れば泥風呂になってしまった。

やがて、この穴にブルーシートをかけプールのように作ればいいことに気付き、露天風呂が生まれたのである。

穴を掘るとドラマが生まれる

穴から様々な物が掘り起こされた。石が出てくると、化石だと言つて騒ぎ、缶が出てくると、原始人が飲んだジュースだと言い、瀬戸物が出てくると、原始人のお皿になり、長い針金が出てくると、大ミズスの化石が発見されたことになる。そして、発掘された物を展示する、博物館が必ずできるのだ。

普段は、土なんか大っ嫌いと言っているH君（四年）も、このお祭り騒ぎにのせられ、「なにやっているの」と言ってきた。もちろん、子ども独特の、やりたいという表現なのだから、彼がスコップを握るのも時間の問題である。

そう、今の子どもたちは「土が嫌い」と言う。滝王子のお祭りのステージで、土の好きな人、嫌いな

人と言って、手を挙げてもらったら、半分以上の人が、嫌いだった。

確かに今の私たちの生活は、土を嫌うスタイルである。マンシヨンの床は、土で汚れた靴で踏むと大変なことになる。

私自身、三階の我が家に帰るとき、階段が泥だらけになっていたのを見て、何だこれとは思ってしまった。そして、その足跡が我が家まで続いていた時は、ドアを開けて息子たちに「掃除してきなさい!!」と怒ってしまった。

こんな状況だから、土嫌いの子どもが増えても何の不思議もない。

最近では、泥団子を作ったことのない子どもも出てきているのだ(だからこそ土と関わるイベントの必要性を感じる。幼稚園、保育園では、ぜひ泥団子コンテスト、泥団子レースをやってほしい)。

気がつくくと、H君も、泥だらけになっている。

「つるはし、使ってもいい？」とH君。

「よし、みんなどいてどいて。危ないからな」

「あまり後ろに振り切るなよ。自分をささないように……」

「よいしょ」

振り下ろすと、ちんと地面に当たって、つるはしが倒れてしまう。

「俺にかして見ろよ」とそばで見っていた中二のO君。

さすがに中学生。見事な掘りっぷりである。一掘りごとに歓声上がる。

O君の友達も加わり、ぐんぐん穴は深くなる。

夏休みの宿題をやり、センターの後ろの図書館に行くところだったのだろう。参考書や問題集が庭の隅に置かれている。汗だらだらである。蟬の声やけに響く。

「こんなもんかな」

私に目を合わせ、にこりと笑う。

うなずくと、「また後でくるよ」と言って手の泥

をはたきながら、図書館へと向かった。

穴を掘れば、人の輪ができる

いろいろな掘り手がいた。

Aくんは中学一年生。最初は「なにやってんだか」という感じで見ていたが、知り合いの小学生に誘われ、穴掘りを始めた。

しばらく掘っていると、カッチンと石の手応え。

周りを掘ってみるが、かなり大きい。つるはしでも手に負えない。周りを少しずつ掘り進む。

どのくらいたっただろうか。やっと石がぐらりと動いた。でもここからが大変である。スコップを横に入れたり、つるはしを使ったり。A君はもう考古学者のようである。

とうとう石は掘りあげられた。

縦五十センチ直径三十センチぐらいの円柱。切り株のように作られたコンクリートの固まりだった。

「やったあ」、子どもたちの歓声。A君は一躍ヒー

ローになってしまった。

コンクリートの固まりは、さっそくそばに作られた、博物館に展示された。

「おつ、これ俺が子どもの時ここにあったやつじゃん」

ボランティアのR君（二十三歳）が言った。

どうやら、彼がこの児童センターの学童だった頃の遊具だったらしい。

子どもの頃を語るR君。A君とR君は、急に何か親しくなったように見える。

遊具だけではなく、R君の子ども時代もいっしょに掘り出されたのかもしれない。

もう、夕暮れだった。



掘りおこされるイメージ

こんなこともあった。掘っていくと、れんがの固まりにぶつかった。

周りを掘ってみると、大きい。

「壁だよ、壁」

「あつ、段々になっている……階段だ」

「でも、何でこんなところに階段があるんだ？」

子どもたちの謎は深まるばかり。

「地底人でもすんでいるんじゃないの」と一人がぼ

そつと言うと、みんな急にわきたった。地底人とい

う言葉が、みんなのイメージに火をつけた。

「どんどん掘っていたら、地底人の天井に穴あけ

ちゃったりして……」

「下で、地底人が家族でご飯食べていたりして

……」

「困るなあ、こんなことして」と言って怒ったり

してね……」

話ほどまるところを知らない。

イメージの核が掘り起こされたのだ。

露天風呂完成

こうして穴を掘り続け、とうとう露天風呂完成の日を迎えた。

掘られた穴の周りに木枠をつけ、作った土嚢で押さえる。

そして、ブルーシートをかけ、さらにシートを土嚢の下に巻き込めば出来上がりである。

お湯は湯沸かし器からホースで引いて、流しそめん用の竹のといを通して湯船に……。

ほんとに温泉気分である。

入浴剤を入れると、いい匂いが庭中に広がった。

6年のN君が、入浴剤の効能書きを朗読しだした。

「疲労回復、打ち身、捻挫……」。庭の向こうの道を通る人が、何かとこちらを見る。そして、気持ちよさそうに温泉に入っている子どもを見て、に

こつと笑いながら通り過ぎていく。

ここは、東京・品川・大井五丁目、滝王子児童セ

ンター。

夏休みが、のどかに過ぎていく。蟬はまだないて
いる。

(滝王子児童センター)

日常の遊びの中で突然気づいた体験

ーU夫がつくったテントからー

清原 規子

この四月にU夫は一年保育で私たちの園に転入してきた。U夫のご家族とも話をして、おとなの援助が少し必要だろうということでは私が彼の担当となっ

た。

園生活が始まった。他の子どもたちが興味をもつてU夫に関わってくると、無理することなく、自然

一緒にいる姿が見られ、私自身もゆったりと関わることができた。

砂場のおもちゃで遊ぶ

毎日U夫と一緒に過ごしていく中で、どうやら砂場のおもちゃの赤や青の車、青や緑の新幹線等が好きなようだと思いがついた。また、その車たちは彼にとっては「機関車トーマス」の仲間たちであった。

私が砂場に行くと、新幹線、車、ブルドーザー等を半分砂に埋めながら動かして遊んでいる。
(四月十七日)

U夫、砂場の半分近くを使って、大きく線路(道路?)を作り、新幹線二台位と車を砂の中に頭を少しだけ出して埋めている。Y先生がU夫の新幹線を見ながら「お名前は?」と聞くと、一台の砂に埋めていないものの上げながら「エドワード」という。(五月十一日)

U夫の母親に聞くと、昔から「機関車トーマス」

が大好きとのこと。この遊びがU夫の幼稚園での毎日の遊びの中心となっていく。そしてその中で、少しずつ変化が見られていった。

今日はなぜか砂場の枠の外の所で、新幹線や、木の車両(貨車)を見つけてきてそこに砂を積んだりして遊んでいる。(五月二十日)
昼食後(注:昼食は私とは別行動である)行ってみると、バス乗り場へと続く屋根のある通路で、今度は三つ貨車をつなげ、上から砂を入れている。
(六月三日)

トーマス遊びをする時は、砂場でしていた日々が



ほとんどだったのが、砂場の枠から出て、記録にはないが、ある日、砂場から園庭に車を使って線路（道路？）を長く描き、そしてそのうち、全く別の場所ですーマス遊びが始まる。

七月に入ってから、おもちゃでのトーマス遊びは少し減り、外の水場に水を貯めたり、ホースで勢いよく水をとばしたりする遊びや、青い三輪車を乗り回したりすることが増えてきた。しかし私には、活動的な水遊びや三輪車遊びの合間の、静かに、車を砂に埋めたり、貨車に石炭のように砂を積んだりする活動がU夫にとっては非常に大切に思えた。そしてこの頃、U夫にとってトーマス遊びは何だろうとその姿を見る度、思いをめぐらすようになった。

遊戯室のブロックで、自分で作って遊ぶ

夏休みも終わり、久し振りに幼稚園に来たU夫は、何日か後から園舎二階の遊戯室で遊ぶようになった。

大型ブロックを出してきて、車のついたブロックに二つの凹型のブロックをつける。もう一つ車のついたブロックをもってきて「つなげよう」という。私「ん？ つながる？」というところ、四つの凹型のブロックを持ってきて

しっかりと二つを連結させる。（九月四日）
二階へ。汽車（U夫が作った赤いものと青いもの）の踏切を作り出す。（九月十六日）

二階に行ってブロック遊び。私は、その場に、ただ、いる。というのが重要なようで、動く。「あ、すわって」「ここ」等言ってくる。赤と青の車をそれぞれ作る。繋げたりも。結構左右対称に作る。赤と青の車を走らせたり、前面の部分を見て指をさしながら「顔、鼻、口、眉毛、煙突」等言ってくる。

（九月二十八日）

特に、運動会が終わった後は、私自身も開放的だったように思うが、U夫も気のせいかゆったりし

ているように思われた。

また、この赤と青の車はかなり大事なようで次のような場面も見られた。

いつものように赤の滑車、青の滑車をそれぞれに繋げて作り始める。年中のK夫、Y夫に赤の滑車をとられて「ちようだい」と一生懸命。「ほら、これあるよ」と他の色のものを持ってきてそれと交換してほしいといっている。私が代弁をして「他の色と交換してつて」と伝えるとしばらくしてK夫、「じゃあいいよ」と替えてくれる。(九月三十日)

一学期に続き、この赤い車と青い車はU夫にとつての「機関車トーマス」だと思ひ、ますます私の中で「彼にとつてトーマスとは何だろう」と考えることが多くなつていった。

朝、二階へ行くも、一通り繋げると下に降り、一階から小さなブロックを持つてくる。

(中略) その小さなブロックを持つてクラス

に行き、人形の乗つた車を作る。

(十月四日)

そんな中、このように遊ぶ日があり、私は、興味を持ちつつ、トーマス遊びがまた、変化してくるのだからと、漠然と思つた。

テントを作つて嬉しそうに入る

十月六日、U夫はお昼の時間に、私を二階につれて行き、ブロックを少しずつ積み重ねては「ほら」「ほら」といい、何やら作り始めた。長いものや短いものを組み合わせて作つていたものは、随分とガッシリとしたものになり、U夫は「ほら、テント」といいながら、自分が中に入り、すごく嬉しそうに笑つていた。その瞬間、私は「こんなにもU夫の中で構築していたものがあるのか」と直観的では



あるが、感じ、感動した。その中に入ったU夫は、奥の方に入っては、私が「あれ、U夫、どこにいったかな」というと下の隙間から足を出してみたり、横の穴から手を伸ばしてみたりという遊びを何度も何度も繰り返した。

私にはそのテントが、確実にU夫の中に築きあげてきたU夫自身に思えたのである。そしてその思いが、トーマス遊びの中の機関車たちも、やはりU夫自身なのではないかという思いに繋がった。出来合いのおもちゃから、次に自ら、自分自身を作っているかのように大型ブロックで赤や青、時には緑やいろいろな色の組み合わせの汽車を作り、何度も何度も作りその過程の先にこのテントがあるように思えた。U夫にとって「機関車で遊ぶ」から「機関車を作る」になったこと、その一つ一つが非常に大きな

意味があるのでは、と感じた。

最後に

U夫の遊びは彼にとってどうやら大切なものらしい、と思いつつも、毎日続く中で時には、表情は楽しそうだけれど、ずっとこの遊びをされていていいか、と迷うことも正直言うことがあった。遊びの中の小さなことを一緒に共有してきてよかったと思ってる。

U夫が作ったものが、私にいろいろなことを気付かせてくれた。これからの残りの園生活も、園全体の暖かな空気の下、心豊かに共に過ごしていきたいと願うばかりである。

(福岡市清星幼稚園)

編 集 後 記

今月号の特集は「へつくる」です。さまざまな分野の六人の方に書いていただきました。

*

わが家ではいつの頃からか折り紙でいろいろなものをつくってきました。近くに越して来た私の母が、タンスの引き出しにいつも折り紙を用意して待っていてくれたことがきっかけになったのかもしれない。

折り紙は、毎日夕方、テレビを見せてもらいに訪れる二人の子ども達と祖母とが繋がるかっこうの材料だったようです。入園前という年齢のせい、教わって折ることはあまりありませんでした。

二人は夕方の一時間ほどを共に過ごして、「おばあちゃん、はい！」とその日に折ったり切ったりしたものを、おみやげにおいて帰って来ていたようですが、私はそのことをしばらくは知りませんでした。

年末になって「作品展をするから見に来て」と声を掛けられ、子ども達と母の居間に行ってみました。紐でぶら下げられた一枚のボール紙にその年に二人がつくった拙い作品が貼られていました。それは二人にはとてもうれしい出来事だったようです。その作品展は年を追って賑やかになり、ついに「どうやって貼ったらいいものか」と母を悩ますような立体のものも登場しました。いまでは、「お母さん、はい！」と渡された作品はわが家の玄関におかれています。

(A)

幼 児 の 教 育

第九十九巻 第二号

(二〇〇〇年二月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十二年二月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二丁目一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五丁目一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一一四一九

〒〇三三三五三九五五五六六〇三(営業)

〒〇三三三五三九五五五六六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇一〇一〇一〇一九六四〇

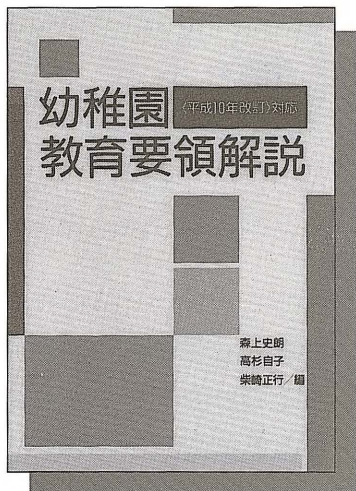
☆ 本誌ご購入のご注文は発売所「フレーベル館」にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

平成10年改訂対応

幼稚園教育要領解説

付録 平成10年改訂・幼稚園教育要領全文



平成10年に改訂され、今年から実施される新『幼稚園教育要領』をより深く理解するための、教育要領解説書の決定版！

第一線の研究者・保育者が結集し、理論・実践の両面から、新教育要領を総合的に解説します。

森上史朗 高杉自子 柴崎正行／編著

A5判・並製・カバー付・288頁

定価：本体1,600円＋税

【主な内容】

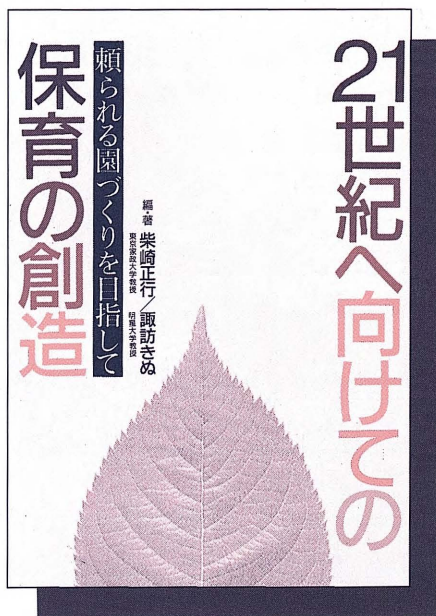
- 第一章 幼稚園教育要領はどのように変わってきたか
—元年から10年までの子どもを取り巻く環境の変化と、改訂までの概略—
- 第二章 幼稚園教育の考え方の基本
—平成元年教育要領の基本を解説—
- 第三章 幼稚園教育の充実と発展(10年改訂のポイント)
—元年教育要領との相違点を詳しく解説し、新教育要領がめざすものを、くつきりと浮かび上がらせませす—
- 第四章 幼稚園教育要領の内容
—教育要領の組立て、子どもの生活と遊び、各領域の意味と相互関係について、詳しく解説します—
- 第五章 幼稚園教育を計画し実践するために
—指導計画作成のための考え方の基本を詳説します—
- 第六章 教師の役割
—10年改訂で強調された“教師の役割”のポイントについて詳説します—
- 第七章 幼稚園運営の弾力化
—これからの幼稚園運営の方向を明らかにします—

好評
発売中

キンダーブックの
フレール館

頼られる園づくりを目指して

21世紀へ向けての保育の創造



最新刊

幼稚園教育要領、保育所保育指針の改訂を踏まえ、単なる制度改革解説の域を越えて、先進的な実践事例を取り上げながら、改革における意義や問題点にも言及しています。まさに今現場で知りたいと強く望まれている内容となっています。

柴崎正行・諏訪きぬ 編著

A5判 224頁 定価：本体2,000円+税

キンダーブックの
フレール館